

花のゆりかご、星の雨

二〇一五年四月二八日 一三稿 黒澤世莉

一幕四景 七五分

登場人物 五人 男二人 女三人

シロタユトリ・ハニユウダケンジ 男

トウジゲンジロウ・ハルタダイキ 男

エナツキリコ・アケボシリュウ 女

ハルタミキ 女

シロタチアキ・ハルタリツコ 女

時代 平成二〇年代、および昭和二〇年代、五〇年代。

季節 一景二景四景、六月。三景、一二月。

場所 日本。一景四景、東京下町。生活こつとう屋店内。二景、富山の

花屋。三景、東京市街。

メモ 配役は四名が二役をやる五名が望ましいですが、最大九名まで増

やせます。

もろもろ、演出にあわせて、ご自由にあつかって下さい。

本編

一景 生活こつとう屋店内。決して広くはない店内に、ヨーロッパと言わずアジアと言わず、世界各国の品物がところ狭しと並べられている。一見雑然として見えるが、一つ一つの品物は清潔に保たれていて、こつとう屋に特有の埃っぽさもさほどには感じられないところに、この店の矜持が伺える。

店内中央、レジの前のこぢんまりとした作業スペースに、イスを修繕するユトリと、神妙に振舞っているトウジがいる。

ユトリ いいですよ。

トウジ では。

ユトリ 奥さんには一緒にサイクリングしてたつてことにします。

トウジ ありがとうございます。

ユトリ 仏の顔も三度ですよ。いい加減にしといたほうがいいと思いますけどね。

トウジ いや、ぼくもそう思うんだけどね。(間) 終わりそう、それ。(間)

いや、あいかわらず惚れ惚れする手際の良さだねえ。修理する手つきが芸術品。

天才こつと屋。

ユトリ バカにしてるんですか。

トウジ 褒めてるんだよ、心から。

ユトリ 今度はどんな子ですか。

トウジ いや、それは企業秘密。(間) 大学生。

ユトリ (間) うらやましいと思った自分が情けない。

トウジ 自然なことだよ。

ユトリ もうその子とは会っちゃダメですよ。

トウジ 分かった。

ユトリ はい。

エナツ、入場。

エナツ いらつしやいませ。

トウジ お邪魔しています。今日もきれいだね。

エナツ ありがとうございます。お店はいいんですか。

トウジ うん、今日は予約ないから。

エナツ あらめずらしい。

トウジ 平日はこんなもんだよ。

エナツ 天気もアレですしね。(間) サイクリングどうでした。

トウジ 最高だったよ、ね。

ユトリ 知ってますよ、エナツさん。

トウジ なんて言っちゃうのさ。

ユトリ すっぱかさされたら言うでしょう。

エナツ 最低。

トウジ キリコちゃん、このことは内密に。

エナツ えー、またですかあ。どうしようかなあ。

トウジ 頼むよ、この通り。

エナツ さてはて、むむー。

トウジ あの、ちよつといいワインとか、飲みたい気分じゃないですか。

エナツ ああ、いいですねえ。

トウジ じゃ、それで。

エナツ ワイン飲んじゃえば、忘れてしまうかもですねえ。

トウジ ありがとうございます。

エナツ でもたいがいにしといたほうがいいと思いますよ。また血を見ち

やいますよ。

トウジ はい、気をつけます。

ユトリ 表、閉めてきてもらってもいい。

エナツ あ、はーい。もういい時間ですね。

エナツ、退場。

トウジ 危機一髪。

ユトリ 娘が。こんなのに傷物にされたら。イスに――

トウジ このラギオール見せてもらっていいかな。

ユトリ はい、少々お待ちください。

ユトリ、ショーケースから一本のソムリエナイフを取り出し、トウジに渡す。

ユトリ どうぞ。

トウジ これ、すごいねえ。

ユトリ ソムリエナイフの代名詞ラギオール、一九世紀に作られた逸品で

す。

トウジ 見たことないね。もとからこういうレリーフのかな。

ユトリ いえ、違うでしょう。もとは無垢のローズウッドだったものに、後から彫ったみたいです。

トウジ へえ。

ユトリ いい腕ですよ。このウサギの、間の抜けた感じとか、ちよつとすごいです。

トウジ バラもいいよ、力強くて、繁栄するぞつて意気込みがある。有名な人なの。

ユトリ 無名です、というか分からないです。たぶん根付職人だろうと思うんですけどね、昔は無名の名人がゴロゴロいたんですね。

トウジ うん、いい。いいね。これ、もらつていい。

ユトリ もちろん。お店で使われるんですか。

トウジ プレゼントで。

ユトリ、怪訝な顔でトウジを見て、ため息をつく。

トウジ 違うよ、女じゃないよ、こんど若いのが独立するからさ、そのお祝いにと思つて。七年、いや八年か。オレも年をとるわけだ。支払いは月末でいい。

ユトリ ええ、請求書お送りします。あ、贈答用でしたら――

トウジ いい、いい。このままもらつてくよ。

ユトリ でも。

トウジ バイトでラッピングしてるつていうから、頼んじやうよ。

ユトリ 大学生の彼女ですか。

トウジ 口実づくりも大事だから。

ユトリ まったく反省してないですね。

エナツ、入場。

エナツ　ちよつとバラついてきました。

トウジ　じゃあ、そろそろ。

エナツ　口止め料、お待ちしますよ。

ユトリ　ありがとうございます。

トウジ、退場。

エナツ　トウジさんもこりない人ですねえ。

ユトリ　あれさえなきやいい人なだけどなあ。

エナツ　道楽みたいなもんですからね、仕方ないでしょ。

ユトリ　え、エナツさん大丈夫なひと。

エナツ　まさか。私だったら速攻別れます。浮気とかする奴らは死ねばいいと思います。出来たら、どうしましょうか、それ。

ユトリ　連絡してもらつていい。あとは任せるよ。

エナツ　お代はどうしましょう。

ユトリ　そうね、五千円くらいでいいかな。

エナツ　せめて一万円はいただきますよ。店の儲けよりも、お客さまの安心感の問題です。安すぎると心配でしょ。

ユトリ　お任せします。

エナツ　他に引き継ぎありますかね。

ユトリ　いや、大丈夫。

エナツ　じゃあ、帳簿整理しています。

ユトリ　うん、ほんと、ありがとうございます。助かります。お留守番、よろしくお願ひします。

エナツ　どうせヒマな店ですからね。

ユトリ　ヒマな店だからね。

エナツ　高知で山ほど仕入れてきて、こっちでガンガン売りましょう。

ユトリ　うーん。

エナツ　へんなの掴まされないでしょ、店長。自信持つてください。地味ですけど。

ユトリ 地味なんだよなあ。

エナツ 芸を、押し出した方がいいんじゃないですか。

ユトリ だつてそしたら、スピリチュアルなお店みたいになっちゃうだろ。いやだよ。(間) 終わったたら、このまま出ちゃうから。

エナツ はい、終わったたら帰ります、わたしも。お気をつけて。

エナツ退場。ユトリはイスの修理に集中している。しばらくして、慌てた様子のハルタ入場、駅から走ってきた様子。

ハルタ すみません。

ユトリ いらつしやい、でもすみません。今日はもう閉め――

ハルタ ごめんなさい、ちょっと、残業で、

ユトリ またの機会に――

ハルタ あのすみません、取り置いていただいているモノだけいただければいいんですけど。だめですか。

ユトリ、時計とハルタを見る。間。

ユトリ 構いませんよ。お名前いただいてもよろしいでしょうか。

ハルタ ハルタです。ハルタミキ。

ユトリ ハルタミキさんね。ちょっとお待ちください。

ハルタ はい。

ユトリ、帳簿を確認するが、ハルタの名前が見つからない。

ユトリ 降ってきましたか。

ハルタ まだ大丈夫でした。

ユトリ いつも来ていただいていますよね。

ハルタ はい。

ユトリ 遅くまで大変ですね。

ハルタ いえ。

ユトリ お住まいはお近くなんですか。

ハルタ はい。(間) このお店は長いんですか。

ユトリ そうですね。かれこれ七年くらいですか。

ハルタ いいお店ですよ。(間) この辺なんもないのに。ここにあって良かった。

ユトリ そう言っていただけだと、目黒とか世田谷とかにしないで良かったです。

ハルタ アレも、はじめて見たときから欲しかったんですけど、でもやっぱり手が出せなくて。

ユトリ ああ、ねえ。

ハルタ それでずいぶん悩んだんですけど、でもアンティークって一期一会じゃないですか。

ユトリ ほんとそうです。

ハルタ なので、定期預金を解約して。

ユトリ それは、ありがとうございます。(間) ところでお品物は。

ハルタ あ、そこに飾ってあったソムリエナイフなんですけど。

ユトリ ひよつとしてラギオールのやつかな、一九世紀の。

ハルタ そうです。

ユトリ ああごめんなさい、あれは売れちゃったんです。

ハルタ へ。

ユトリ たったいま。タッチの差で。

ハルタ いやいやいや。

ユトリ すみません。こつちの水牛のは、

ハルタ ないない。だってお金、払ってるんですよ。これ控えます。

ユトリ すみません、ちよつとすぐ確認とります。

ハルタ あり得ないんですけど。

ユトリ エナツさん、エナツさん、ちよつと。

エナツ、入場。

エナツ はい、なんでつしやるかいな。あ、いらつしやいませ。

ハルタ そうこの人です、このひとにお願いしました。

エナツ あ、ソムリエナイフの方ですね。

ユトリ トウジさんにゆずつちやつたんだよ、ちゃんと引き継ぎ表書いてないから

エナツ 店長！。売約済の札も貼っておいたし、直接お伝えしたじゃないですか。

ユトリ そうだっけ。

エナツ 昨日もずいぶん酔っぱらってましたからね、お忘れだったんじゃないですか。

ユトリ そんなわけないでしょ。

エナツ あるじゃないですか、この前だつてコルビジエのソファの――

ユトリ 二年も前のことじゃないか。

ハルタ、いらいらと靴を鳴らす。

ユトリ あ、すみません。とにかく、でも、あの、不幸中の幸いというか、常連さんにお渡ししてしまっているので、ちょっと行つてきますね。

ユトリ、走つて退場。

エナツ いつてらつしやーい。

ハルタ マジであり得ないんですけど。

エナツ ご迷惑をおかけします。たぶん近所のレストランなんで、すぐ戻つてきますよ。あ、お時間平気ですか。

ハルタ 今日中にいただければ。

エナツ そんなに遅くはならないと思いますよ。ほんと目と鼻の先ですから。

ハルタ あそこですか、一軒家で緑がうつそうとしているところ。

エナツ　　そうそう、そこです、そのシェフがよく来てくださるんですね。

超美味しいですよ。今まで食べたことがないものが出てきます。蟹のムースとか。キャビアのムースとか。松葉のムースとか。

ハルタ　　ムースばつかですね。

エナツ　　だってそんなムース、食べたことありますか。あ、お茶飲みますか。

ハルタ　　いえ、お構いなく。

エナツ　　私が飲みたいので。

エナツ退場。

エナツ　　（裏から）アッサムかアールグレイかラプサンションか、あとはコーヒー、インスタントですけど。

ハルタ　　最後のはなんですか。

エナツ　　（裏から）ゴールドブレンドです、違いの分かる男の。（間。歌い出す）だばだーだーだだばだユトリ

ハルタ　　いやそうじゃなくて、紅茶、かな、の、

エナツ　　（裏から）ああラプサンション。香りのキツイやつです、ミルクで割ると美味しいですよ。飲んでみますか。

ハルタ　　じゃあ、それで。

ハルタ、時計を見て、ユトリの出でいった先を見る。

ハルタ　　ちよつと悪いことしちゃいましたかね。

エナツ　　（裏から）いいんですよ。うちが悪いんで。

ハルタ　　でもすごいあわてようだったから。

エナツ　　（裏から）明日からちよつとお休みいただくんですよ。それで奥さんの実家まで行くみたいです。

ハルタ　　ああ、そうなんですか。やつぱり。

エナツ　　（裏から）気にしないで下さい。

ハルタ　　あ、いいにおい、松葉ですか。

エナツ、お茶セットを持って、入場。

エナツ　すごい、よく分かりますね。

ハルタ　お香かと思つた。

エナツ　いいにおいですよー、私も好きなんです。このあいだ正露丸で言われて、二度と飲ませるかと思つたんですけど。

ハルタ　カップも可愛い。

エナツ　可愛いですよ、ファイヤークィング。

ハルタ　ファイヤークィング。

エナツ　それ（とハルタの手元のカップを指す）。紅茶飲むならウエッジウッドとかコペンハーゲンもあるんですけど、ちよつとね。

ハルタ　あたたかみがあつていいですね。でも、売り物なんですか。

エナツ　当店のモットーは「鑑賞よりも実用品」なので。実際に使つていただきたいなと。だつて、カップはカップなんだから、眺めるより口つけて味わう方が本当でしょ。ご遠慮なく。

ハルタ、おそろおそろ一口目のお茶を飲む。

ハルタ　美味しい。

エナツ　よかつた。贈り物、でしたっけ。あのナイフ。

ハルタ　あ、はい。

エナツ　みなまでいな。

ハルタ　いや。ああ、はい。

エナツ　喜ばれるでしょうね。

ハルタ　どうかな。

エナツ　うれしいでしょ、

ハルタ　許してくれると、いいんですけど。

エナツ　あれ、なんか聞いたらいけないこと聞いてます、わたし。

ハルタ　いえ、そんな。

エナツ　よく怒られるんですよ、ずけずけモノを言いすぎるって。

ハルタ　そんなことは、ちよつとあるかも分かりませんね。あのすみませ
ん、お名前は。

エナツ　エナツキリコです。ミキさん。

ハルタ　あの、名字で呼んでもらっていいですか。

エナツ　え、ミキさんで、イヤですか。

ハルタ　あんまり好きじゃなくて。

エナツ　そうですか。木の幹でミキ、お洒落ですよ。まあ、はい。

間。

ハルタ　エナツさんは、どうしてこのお仕事をしようと思ったんですか。

エナツ　うちの店長ちよつとスピリチュアル系なんで、商売はど下手で
けど、モノを見る目は確かなんで。

ハルタ　ちよつとよく分からないです。

エナツ　成り行きです。

ハルタ　よく分からないけど、いいですね。

エナツ　お仕事で何かあつたんですか。

ハルタ　クビになりました。

エナツ　やりたいことやつたらいいです。

ハルタ　特にないので。

エナツ　わたし、もともとコレになりたかつたんですよ。

エナツ、色々と動く。

ハルタ　ダンス。

エナツ　バレエボール。

ハルタ　バレエボール。

エナツ　そう。で、イタリア行って、いろいろあつて、で、現在に至ると。

ハルタ　すごいはしょった。

エナツ 明日はいいことありますよ。

ハルタ バレーボールは、やっぱりケガとかで。

エナツ あ、ケガだけはしたことないの。

ハルタ ああ、やっぱり管理がね、しつかりしてて。

エナツ 努力だけじゃどうにもならないことってあるんですね。今となつては行つて良かったけど。何がどうころぶかなんて、誰にも分かんないですよ。あ、お茶もつと飲んで。

ハルタ はい、いただきます。なんかすいません。

エナツ いや全然いいのよ、昔のことだから。お湯足してくるね。

エナツ、退場。しばしの間。チアキ、手紙と荷物を持って入場。
妊娠している様子。

チアキ こんばんは。

ハルタ こんばんは。いまお店の人、お茶を入れてます。

チアキ あ、そうですか。

ハルタ お呼びしますか。

チアキ いえ、お構いなく。

ハルタ あ、お店の方。

チアキ 妻です、シロタの。(間)店長の。

ハルタ ああ、奥様でしたか。なるほど。ああ、なるほど。

エナツ、ポットと小さなビンを持って入場。

チアキ キリコちゃん。

エナツ あ、チアキさん。(ハルタに)これハチミツ、好みでいれて。

ハルタ ありがとうございます。

エナツ 店長ちよつと出ちゃってます。

チアキ そうなの。ポスト、ここおいとくよ。

エナツ あ、ありがとうございます、カップ持ってくるんで、しばしお待ち

ちを。

エナツ退場。

ハルタ なるほど。お帰りになれるんですか。

チアキ ええ、実家に。

ハルタ やつぱり、ご出産で。

チアキ はい。

ハルタ すみません、店長さんになんかちよつとお願い事をしてしまつて。

チアキ ええと、けつこうかかる感じなのかしら。

エナツ、新しいカップを持って、登場。

ハルタ それは分からないです、

エナツ はい、どうぞ。あ、チアキさんラップサンクション飲めませんよね。

チアキ あの正露丸か。いいよいいよ、

エナツ ちよつと待つてて、アツサムでいいですか。

エナツ、退場。

チアキ カモミールで。

エナツ (裏から) はーい。

チアキ おねがいします。(ハルタに) で、あ、そうそう。うちのが、

ハルタ はい、すぐ帰ってくるつて感じだったんですけど、そのすぐが五分なのか一時間なのかは、ちよつと分からないです。

チアキ でも一時間くらいなのね。

ハルタ たぶん。

二人、雨音に気付く。

ハルタ 傘、持つてきてないや。

チアキ お貸ししますよ。これなんかどうですか。

ハルタ すごい、番傘、つていうんですか。

チアキ そう。ここに屋号が入ってるの。これ私があつたんですよ。

ハルタ へえ、傘職人さんですか。

チアキ ううん、パートで。

ハルタ パートでこんなのあるんですか。

チアキ いろんなお仕事ありますからねえ。

ハルタ いまも働いてるんですか。

チアキ 今日はスーパでレジ打つてました。

ハルタ 大丈夫なんですか。

チアキ うちの人の稼ぎだけじゃ足りないのです。

ハルタ すごいです。

エナツ (裏から) ありましたよーん。

エナツ、カモミールの入ったカップを持つて登場。

チアキ ありがとうー。

エナツ いま入れたばつかなんで、三分くらい待つてくださいね。

ハルタ 実家に帰られるつて、ご出産だったんですね。

エナツ そうですよ、あれ、言つてませんでしたっけ。

ハルタ はい。

エナツ チアキさんが、ねえ。それでお二人で一ヶ月休んで。

ハルタ 素敵ですね。

チアキ 素敵かどうかは分からないけど、キリコちゃんがかんぼつてくれ

てるから。

エナツ へえ、一ヶ月稼がせていただきます。

チアキ どうせヒマな店だからね。

ハルタ ご実家はどちらなんですか。

チアキ 高知です。

ハルタ へえ。ああ、あの。あんまりイメージ無いです。

チアキ まあ、なんにもないですね。でも、いいところですよ。

エナツ ハルタさんはどちらなんですか。

ハルタ わたしは富山ですけど。なんにもないですし、まあ、

エナツ でも、田舎があるっていいですよ。帰る場所がある、みたいな。

ハルタ そんなにいいもんじゃありませんよ。エナツさんは、

エナツ 東京です。東京っぽいでしょ。

ハルタ ああ。

問。

エナツ あ、そうでもないですか。

ハルタ いや、ぽいぽい。

エナツ 地代先取りしてる感じしませんか。

チアキ 先取りしすぎて周回遅れって感じよね、キリコちゃん。

ユトリ、少し雨に濡れて、入場。

チアキ おかえり。

エナツ おかえりなさい。

ユトリ (チアキに) おお、来たのか、

チアキ あらあら、タオルある。

ユトリ ちょっと待ってて。あの、ハルタさんすみません、ちょっとまだ

先方がつかまらなくて、

エナツ あれま。

ユトリ 遠くに行っていることはないと思うんですけど、ちょっと今はまだ。

ハルタ そうですか。

ユトリ すみません。

エナツ すみません。

ハルタ いや、困ります。

チアキ どうしたの。

エナツ ちよつと手違いで、ハルタさんの商品をトウジさんに売っちゃつたみたいで。

チアキ ありやまあ。

ハルタ 明日までないと困ります。

ユトリ 申し訳ない、たぶんあっちのお店が閉店するまでには、

ハルタ じゃあ、待たせてもらっていいですか。

ユトリ ああ、あの、えつと、

チアキ いいですよ。

エナツ いいですよ。

ユトリ いいです。もちろん。

エナツ あ、カップ。

ユトリ あ、おれいいや、自分の、

チアキ お酒はダメ、

エナツ お酒はダメですよ、

ユトリ 分かってるよ。

エナツ、退場。

ハルタ なんか逆にすみません。

ユトリ いえまあ、この時間に出ても混んでるんで、ちようど良かったです。

エナツ、カップを持って登場。カップをユトリに渡して、郵便物を確認する。

ユトリ ほんと申し訳ないです。

ハルタ いえ、でも、今日きちんといただければ、もう全然。まさか出会

えると思つてなかつたモノですし。

ユトリ　　なにか思い入れのあるお品物なんですか。

ハルタ　　ええ、ちよつと。

ユトリ　　よかつたら聞かせてもらえませんか。

エナツ　　ぬあああ。

ユトリ　　(同時に) どしたの。

ハルタ　　(同時に) びつくりした。

チアキ　　(同時に) 産まれちゃうよ。

エナツ　　ごめんなさい、これ店長、おめでとうございます。あれおめでとうございますなのか。おめでとうございました。

ユトリ　　なににない。

エナツ　　フィレンツェから招待状がきてます。

ユトリ　　うおおおおお、やったああ、マジで。

チアキ　　やったね。

ハルタ　　え、どうしたんですか。

ユトリ　　いやずつと会いたかつたケステイチチさんていう、ウフィツイの

キュレーターからの招待状なんだよ、

エナツ　　美術館の名前です、フィレンツェにある、

ユトリ　　日本の古民具収蔵するみたいで、声かけてもらえたみたい。あの建物の中を見せてもらえるだけでマジラッキーだなあ。(間)で、なんて書いてあるの。

ハルタ　　読めないんですか。

ユトリ　　語学はエナツさん担当だから。

エナツ　　親愛なるユトリさん、(間)ちよつと省略しますねイタリア人挨拶

長いんで。(間)ええと、古民具の収蔵に関してのご意見とご協力をいただきました
く、ぜひご来訪ください。日程が七月中旬だそうです。

ユトリとチアキ、目を見合わせる。

ユトリ　　うあ、どうしたらいいんだ、オレは。

エナツ 予定日とまるかぶりですね。

ユトリ どうしよう。

チアキ どうしよう。つて。行ってきたらいいじゃない。

ユトリ 行ってきたらいいじゃないつて、行ったら怒るでしょう。

チアキ 怒らないよ。

ユトリ ほらなんかもう怒りつつあるじゃない。

チアキ 怒ってないつて。行ってきたよ。わたし一人で産むから。

ユトリ ううでも、ケステイツチさんも忙しいからなかなか会えるもんでもないしなあ。

チアキ だから行っておいでつて。通訳にキリコちゃんつれてつて、楽しくイタリア旅行したらいいじゃない。

エナツ わたし巻き込まないでくださいな。

キリコ、ハルタに隠れる。仕方なく話しだすハルタ。

ハルタ わたしが産まれたとき、父はいなかったそうです。お花屋さんなんですけど、やつぱり忙しくつて。父は付き添うつて言ったそうなんですけど、あの人は商売を大事にしないといけないつて、

ユトリ 仕事かどうかって話になってくるね、どっちかといえば、

チアキ ギャラは。

キリコ 書いてません。

ユトリ ある、きつとある。

トウジ、入場、ユトリに走り寄る。

トウジ ユトリちゃん血相変えて躍り込んできたつて、

ユトリ トウジさん、

トウジ ばれた、ばれちゃったの。

ユトリ いやそんなことはどうでもいいんです。

トウジ どうでもいいとはどういうことだ。(チアキに気づいて)あ、どう

も奥さん、

チアキ　　こんばんは。

エナツ　　さつき話してた、ムースのレストランの

ハルタ　　ああ、よく前通りかかっています、

トウジ　　料理長のトウジゲンジロウです、可愛いお嬢さん。

ハルタ　　ハルタミキです、はじめまして。

トウジ　　今度は通りがかかるだけでなく、中にお入り下さい。

ハルタ　　はい、ぜひ。

ユトリ　　あの、トウジさんをお願いがあつてうかがったんですけども、

トウジ　　おうなんだいなんだい、

ユトリ　　大変恐縮なんです、先ほどお譲りしたシャトーラギオールのソ

ムリエナイフをお戻しいただけいかなと。

トウジ　　ダメだよ、もう話しちゃったもん。

ユトリ　　そこをなんとか、先客がいらつしやるものでして。

トウジ　　うそ。

ユトリ　　こちらのお客さまにお譲りいただけませんか。申し訳ご

ざいません。

エナツ　　申し訳ございません。

チアキ　　申し訳ございません。

ハルタ　　ども。

トウジ　　えー、だって、おつとめ品って貼つてあつたし、

ユトリ　　おつとめ品、

エナツ　　あ、それたぶんわたしです。あちゃー、そっちかー逆にねー、

トウジ　　それは納得いかないなあ。

ユトリ　　はい。

トウジ　　だってそれは、一度くれてやると言ったモノをなしにするわけで

しょう。

ユトリ　　はい、申し訳ございません。

トウジ　　無理だよそれは。

ユトリ　　そこをなんとか。

トウジ　あのね、これ、うちの弟子の出店祝いにするんですよ。ウサギのレリーフがあるでしょ、ウサギってのはフランスで幸運を呼ぶ動物でね、縁起もいいのね。だから、もし譲ってもらえるとありがたいんだけど。

ハルタ　わたしが先に買ったんです、どうしても欲しいんです、お願いします。

ユトリ　他にも良い品物が、

ハルタ　これじゃないとダメなんです。

トウジ　理由を聞かせてほしいな。

間。

ハルタ　あの、わたし。一八で東京に出てきて、そのときに祖母の形見のアンティークをあらかじめ持ってきて、全部売っちゃいました。

エナツ　これですか。

ハルタ　分からないんですでも、ウサギとバラのナイフはあの人の一番のお気に入りだったからよく覚えてるんです。違うかもしれないけどよく似てて。

こつちに出てから実家には帰っていないんですけど、明日あの人手術をするんです。それで。

エナツ　なるほど。

ユトリ　そんな大切な品物を申し訳ないです。

ハルタ　いえ、わたしが悪いんです。でも、それで許してもらえるかは分かりませんが。

チアキ　大丈夫よ。

ハルタ　そうですね。

チアキ　わたし娘がなにしても、許しちゃう。怒るけど。

ハルタ　そうですね。

チアキ　めちゃめちゃに怒るけど。

ハルタ　あ、そんなに。

チアキ　でも最後には、絶対。

トウジ　そういう話なら、仕方がない。

ユトリ 　では。

トウジ 　彼女に譲ります。

ユトリ 　ありがとうございます。

エナツ 　ありがとうございます。

トウジ 　ただし条件があります。(間)ゲームをしよう。ブラインドテイス

テイニングをしようじゃないか。

ハルタ 　ブラインド、なんですか。

エナツ 　ワインの味見、ラベルを見ないで中身をあてるの。

トウジ 　キミたちは素人だから、シンプルにやろう。

エナツ 　はい。

トウジ 　キミは審判ね。

エナツ 　えー。

トウジ 　二種類のワインのうち、どちらが高級なワインかを当てる。簡単だろう。片一方のボトルは千円のヴァンドターブル、もう片方が一〇万で出してるオーブリヨン。ま、もともとお詫びの品で持ってきたもんだから気にしないでくれ。

チアキ 　お詫びの品。

トウジ 　あ、そこはひつかからなくていいです。

チアキ 　だって一〇万円で、そんな高級な、

トウジ 　いやいやいや、抜栓済みなんでどうせ飲まなきゃなんのですお
気になさらずに。とにかく、キミがどちらが高いワインかを当てられたら、オ
レは気持ちよくラギオールを譲るよ。

ユトリ 　ありがとうございます。

トウジ 　キミが間違えたら、ラギオールの代わりに、あの志功の掛け軸を

いただく。

ユトリ 　ちょ、あれ、あれはダメですよ。うちの店の魂ですよ。

トウジ 　魂かけないで商売が出来るか。

間。

ユトリ はい。仰るとおりです。分かりました、引き受けます。

チアキ あなた。

エナツ 店長。

トウジ キリコちゃんグラス二個お願い。

エナツ ほーい、じゃとっておきのリーダー出しちゃいますよ。

エナツ、退場。

ユトリ 大丈夫。こつとう屋の意地にかけて、

チアキ 焼酎と日本酒の区別もつかないじゃない。

ユトリ そりゃ酔っぱらったときだろ、いまは素面だ。

エナツ、グラス二脚を持って入場。そのままユトリ、チアキ、ハルタを目隠ししつつ、トウジが和いんを注ぐさまを見ている

トウジ、グラスにワインを入れる。

チアキ 雨、強くなってきたね。

トウジ さあ、どうぞ。

ユトリ、グラス二つをしげしげと眺め、匂ってみたり、いろいろとする。思い切って飲み比べているうちに、両方飲み干してしまう。その様を見ているハルタ、こつそり近づいてワイングラスの残り香を嗅ぐ。

ユトリ うーん。これは。こつちが高い方（とグラスを持つとうとする）

ハルタ ちよつと待ってください。この勝負、ずるいと思います。（間）これ、ワイン以外のものが入ってますよね。たぶんハチミツが入ってます。それで味が分からなくなってるんだと思います。だから、こつちのハチミツが入っている方が安いワインです。

ユトリ、ハルタが指差したグラスと反対のグラスをトウジにさし

です。

間。

トウジ 正解。すごいね、お嬢ちゃん。

エナツ すごい。どうして分かったの。

ハルタ においです。

エナツ におい。

ハルタ 高い方はすごく複雑なおいがするんですよ、石とか土とか、それこそ松葉のにおいがします。こつちもすごくいろんなにおいがするんですけど、でもさつきの紅茶とごくかぶつてるところがあつて、それはハチミツなんです、ハチミツのようなというか、輪郭がハチミツなので。

エナツ すごい。

トウジ いやユトリちゃん、命拾ひしたね。もうこんな雑な商売やつちゃだめだよ。(ソムリエナイフを渡しながら)お嬢ちゃん、うちで働かない、いいソムリエールになるよ。

ハルタ ありがとうございます。考えます。

トウジ 奥さん調子どう。

チアキ おかげさまで順調です。

トウジ もう分かったんだっけ。

チアキ はい、女の子だつて。

トウジ おお、いいねえ。家は男ばかりだからね、やかましくて。すげえ雨だなあ。

ハルタ お祝い、どうするんですか。

トウジ 水牛のでもらおうかな。

ハルタ ウサギいいですよ。

エナツ 当店は修理をウリにしていますから、ウサギの一匹や二匹。

ユトリ 修理の域を超えてるよ、すごい職人が作ったんだぜ。

ハルタ サラリーマンです。

エナツ ほら、出来る出来る。

トウジ お母様、喜ばれるでしょうね。

ハルタ 怒られると思います。

チアキ めっちゃめっちゃ怒るね。

ハルタ お腹痛い。

ユトリ なんでサラリーマンって知ってるんですか。

ハルタ 祖父が彫ったって聞いてます。もし母のなら、ですよ。

ユトリ じゃ、それ、確かめてみましょうか。

間。

ハルタ え。

エナツ え、今日出発じゃ、

チアキ やりますか。

エナツ 修理も途中じゃないですか。

ユトリ 明日やる。

トウジ おお、アレやるのかい。

ユトリ ごめんねチアキさん。

チアキ 許さない。

エナツ 飲むなら安い方にしてください。

ユトリ 分かってるよ。

ハルタ え、なんの話ですか。

トウジ いい飲みっぷりだねえ。

チアキ このひとちょっとすごいのは、商売はテンでダメだけど、アンテ

イークのことだけは。

ユトリ あの微妙にへこむんでやめてもらっていいですか。

チアキ 褒めてるの。

ユトリ いや、はい。

ハルタ ですから、なんの話ですか。

エナツ 店長、モノの記憶をたどれるんです。

ハルタ モノの記憶。

間。

エナツ　　いますピリチュアルだつてドン引きしましたね。

ハルタ　　正直そうですね。

エナツ　　まあ騙されたと思つてやつてみて下さいよ、たぶん説明するより速いんで。

ユトリ　　では、まず、お品物に触れてください。目をつぶつて、大きく息をしましょう。吸つて、吐いて、そう、繰り返してください。手で、そのモノの大きさ、重さ、形、感触、あなたが感じ取れることを感じ取ってください。ぼくが三つ数を数えたら、あなたはそのモノの記憶を旅します。サン、ニ、イチ、はい。

トウジ、ユトリ、キリコ、チアキ、退場。

二景

昭和の終わり頃。花屋。リツコがノートに何かを書いている。

ミキにはすべてが感じられているが、他の登場人物にミキの存在は分からない。

リュウ、入場。

リツコ　　いらつしやいませ。

間。

リュウ　　こんなところに。

リツコ　　どうして。

リュウ　　どうだつていいでしょう。

リツコ　　お引き取りください。

リュウ　　入るわよ。

リツコ　　帰つて。親子の縁を切つたんじゃないの。

リュウ 何ヶ月。

リツコ 八ヶ月。

リュウ そう。おめでとう。

リツコ ありがとう。

リュウ 帰ってきなさい。

リツコ どういう意味。

リュウ みすばらしい町ね。

リツコ いいところよ。

リュウ 花屋の仕事は順調なの。どうせお金に困ってるんでしょ。あなた商売なんて向いてないんだから。

リツコ あなたには関係ないことです。

リュウ こんなところでまともに育てられると思うの。

リツコ 話すことはなにもないです。お引き取りください。

リュウ 裾。ほつれているわよ。お金がなくても身なりはきちんとなさい。

リツコ 早く。

リュウ 身だしなみも整えられないような女が家庭を守れるのかしら。

リツコ 体面ばかりを気にしているひとは分からないでしょうね。

リュウ 私がどれだけ苦労したと思ってるの。

リツコ 探してくれなんて頼んでいないわ。

リュウ 私のことを嫌うのは構わないわ。お父さんがどれだけ心配していると思っているの。

リツコ だったら自分で来た方がいいじゃない。どうせ仕事なんでしょう。

あなたたちはきれいな言葉を使って、身なりもきれいに取り繕っているけど、腹の底では自分たちのことしか考えていない。

リュウ 自分ひとりで生きているつもり。自分ばかりがづらい思いをしているつもりなの。

リツコ あなたが求めるのは私じゃなくって、なんでも言うことを聞く人形でしょう。もう沢山。兄さんと姉さんがいるじゃない。私に構わないでください。

リュウ その子はどうするの。家族なしで育てるの。

リッコ 私もダイキさんもいます。

リュウ 自分の都合で寂しい思いをさせるの。

リッコ 誰のせいでこうなつたんですか。

間。

リュウ 分かりました。おいとまします。

リッコ はい。

リュウ お達者で。

リュウ、退場。

ハルタ お母さん。

リッコ ん、なあに。

ハルタ 大丈夫。

リッコ 大丈夫よ。あなたはなんにも心配しなくていいのよ。ごめんね、

大きな声をだして。びつくりしたね。

ハルタ ううん、いいの。

リッコ おばあちゃん、ほしい。

ハルタ 可哀相。

リッコ そうよね。ほしいわよね。

ダイキ、仕入れた花の箱とともに入場。

ダイキ ただいま。

リッコ おかえりなさい。この子いま元気よ。

ダイキ どれどれ。おお、本当だ。

リッコ いいシャクヤクね。

ダイキ いい鼻してるねえ。キョウチクトウもいいのが入つたんだ。あと

サギソウも。

リツコ　　いいにおい。お向かいのアジサイも。

ダイキ　　ああ、ちょうど見頃だね。あそこの家は手入れがいいんだね、枝振りに味がある。ハサミの入れ方が違うんだなあ。

リツコ　　そう、あなた聞いて、この子の名前。

ダイキ　　またその話か。

リツコ　　今日のは本当にいいのよ。

ダイキ　　いい加減ノート一冊分になるぜ。

リツコ　　女の子でも、男の子でも、ミキがいいわ。

ダイキ　　いいね、美しい樹と書いて、ミキかい。

リツコ　　いいえ。木の幹と書いて、ミキ。

ダイキ　　おお。大胆だね。

リツコ　　私はね、この子に力強く生きてほしいのね。苦勞もするだろうけど、そういうときに自分を見失わない、芯をもった子になってほしい。だから、ミキ。

ダイキ　　ミキ。いいんじゃないか。ところで。

リツコ　　あ、ごめんなさい、いま支度しますね。

ダイキ　　ああ、いいよ。

リツコ　　お腹すいたわよね、

ダイキ　　そこでお母さんにあつたよ。

間。

リツコ　　そう。

ダイキ　　家に来たんだろう。

リツコ　　ええ。

ダイキ　　いいのかい。

リツコ　　いいの。もう決めたことだから。

ダイキ　　東京に帰らないのかい。

リツコ　　帰ってほしいの。

ダイキ　　お母さんはそうだろう。

リッコ 私はここにいたい。あの家にいるのはいや。

ダイキ でも心配してたぜ。

リッコ あのひとが。まさか。自分のことしか考えてない人よ。

ダイキ 悪くいうのはやめろよ。

リッコ あの人のこと知らないでしょう。

ダイキ 聞いている方が気分が悪い。

リッコ あなた、あの人の味方なの。

ダイキ 莫迦、俺はお前の味方だよ、決まっているだろう。お前の味方だから、せつかくの機会を無駄にしてほしくはないんだよ。

リッコ せつかくの機会って、私を東京に追い出すってこと。

ダイキ 違う。(間)ごめんよ、言い方が悪かった。でも、もしこの子がお前のことを「あの人」なんて言ったら、俺は悲しいよ。

間。

リッコ ごめんなさい。

ダイキ 仲直りの機会だろう。

リッコ あの人にそんなつもりなかった。

ダイキ そのつもりがないのは、お互い様じゃないのか。わざわざこんな田舎まで来たんだぜ。

リッコ 世間体が悪いからでしょう、末の娘が駆け落ちしたなんて、あの人には耐えられないのよ。だから連れて帰りに来た、それだけよ。

ダイキ 本当にそうか。本当にそう思っているのか。お前も本当は分かっているんじゃないのか。

リッコ あの人が自分勝手だったことは、よく分かっていますよ。

ダイキ (包を渡しながら)これ、お母さんから預かったよ。娘をよろしくお願いしますって、深々とお辞儀されたぜ。追いかけて良いのかい。一緒に行こうじゃないか。

ハルタ 花のゆりかご

ダイキ さあ。

ハルタ　　ゆられるわたし

リツコ　　（ソムリエナイフを手に取り）一度なくしたものは、取り戻せないのよ。

ハルタ　　月夜のゆびわ　よりそうふたり

ダイキ　　ならゼロからやりなおそう。

リツコ、ダイキ、退場。

三景

昭和二〇年頃。焼け野原の街角。リュウがいる。

ミキにはすべてが感じられているが、他の登場人物にミキの存在は分からない。

ハニユウダ、入場。

ハニユウダ　　リュウさん、リュウさん。やっぱりそうだ。

リュウ　　ご無沙汰しております。

ハニユウダ　　いやあ、良かった、良かった、生きてらっしゃった。

リュウ　　お勤めご苦労様でした。

ハニユウダ　　いえ、とんでもない。シベリアはここよりちよいとだけ寒かったですかね、ははは。

リュウ　　本当に、ご無事で、なによりでした。

ハニユウダ　　はい。私は。ですが残念ながら、兄は。

リュウ　　そう、ですか。

ハニユウダ　　はい。別の大隊にいたのですが、抑留中に結核をわずらって。大丈夫ですか、お気を確かに。

リュウ　　覚悟は出来ていましたから。そうですか。

ハニユウダ　　それで、金目の物は全部没収されてしまって、なにも残っていないのですが、

リュウ　　では、私はこれで。

ハニユウダ　　ちよっと待ってください。そう邪険になさらないでください。

リュウ 邪険に。私が、ですか。

ハニユウダ すぐに立ち去ろうとなさる。

リュウ それは。私の気持ちも察してください。

ハニユウダ いえ、察しません。私はもうすこし、あなたと話がしたい。

間。

リュウ 一つお着ぎになったのですか。

ハニユウダ 昨日です。新潟からいや、ひどい列車に揺られてきました。屋根まで兵隊で一杯ですよ。途中何人か落ちたんじゃないかな。

リュウ 今日日列車はどれも満杯です。

ハニユウダ そう、寿司詰めめちゃリだつてもうすこし余裕があるだろうと思えました。寿司気分で列車を降りたら、これが東京かと目を見張りました。あんまりな有様です。もちろん家に帰ろうにも焼けてしまっている、リュウさんの家もない、途方に暮れました。なんとか同級生を見つけて、そこに世話になっています。

リュウ これですいぶんマシになったんですよ。少なくとも死体は片付きました。

ハニユウダ 本当に、非道いことしやがる。

リュウ そうですか。

ハニユウダ 許せません。

リュウ 私は、好きですよ。いまの街。

ハニユウダ そう、ですか。

リュウ いまは自由だわ。生きるも自由、死ぬのも自由。あなたには不都合でしょうけど。

ハニユウダ そうとも言い切れません。私たち兄弟は、ずいぶん卑猥なものを造つてにられました。都合がいいといえればいい、なんでも好きなものを彫れますからね。昔のものは、全部焼けてしまいましたが。

リュウ それがいいんですよ。この国は木でものを造るでしょう。焼けてしまうでしょう。燃えてしまえばすべてが美しくなりますもの。

ハニユウダ 自分の家族が死んでもですか。

リュウ はい。私の家族も死にました。

ハニユウダ リュウさんは疲れていらつしやるだけです。

リュウ 私の何を聞きました。

ハニユウダ なにも。

リュウ 嘘おつしやい。

ハニユウダ ゴシツプ好きには好きに言わせておけばいいでしょう。

リュウ 何を言つてらつしやるの。難しいことじゃないわ、ただ私は、綺麗な服が着られないと厭だし、お腹を空かせるのも厭だし、誰かを待ち続けるのも厭。惨めな思いをするのは厭なの。だから戦争に負けて、嬉しい。

ハニユウダ 勘弁して下さい。

リュウ あなたがこんなお喋りをはじめたのです。

ハニユウダ 目を開けてください。ここには焼け野原しかありません。瀟洒な館も、召使いも、フランスワインもないんです。

リュウ 私がやむにやまれずパンパンになったと思われてるんでしょうけど、違うわ。自分で選んでやっているの。家柄なんて、腹の足しにもなりやしない。召し上がります、チョコレート。蕩けるように甘い、チョコレート。

間。

リュウ だから厭なんですよ。そういう目で私をご覧になるでしょう。私を放っておいて下さったら、あなたも私もこんな思いをせずに済んだのです。

ハニユウダ なにも残っていないのですが、でも連中このナイフの値打ちだけは気づかなかつたので。兄の遺品です。

リュウ これは。

ハニユウダ はい、リュウさんの干支のウサギです。

リュウ あの方、嘘吐きです。

ハニユウダ 兄は嘘を吐くような男ではありません。

リュウ きつと帰ってきて、お返し下さいねって約束したのに。(間)有り難う御座います。葡萄酒はあまり好きではなかつたけれど、あの方が栓を抜く

姿は好きでした。手つきが手品師みたいで。

ハニユウダ 結婚して下さい。

リュウ ご冗談はよして下さい。

ハニユウダ あなたがご自分を切り売りされていても、生きるためには仕様の
ないことです。たとえばあなたの身体が汚れても、あなたの魂までが汚れたこと
にはなりません。

リュウ 私自分が汚れているなんて思っていないわ。

ハニユウダ いいえ、思ってたっしやいます。あなたは自分を傷つけることで、
なにかの罪を償おうとなさっている。ですがそれは間違っています。

リュウ もう行きます。

ハニユウダ 私があなたを贖わせて差し上げます。

リュウ 無理ですよ。戦争に負けたんですよ。もうどうしようもないじゃ
ないですか。

ハニユウダ これ以上悪くなりようがないじゃないですか。働きますよ。働い
て働いて、誰もリュウさんに文句を言わせないようにになります。兄に負けない、
立派な職人になります。

リュウ 物好きね。

ハニユウダ はい、シベリアで頭をやられてきました。

間。

ハニユウダ ところで、そのチョコレートいただいていいですか、腹が減って
腹が減って。(リュウ、ハニユウダにチョコレートを渡す) 出世払いでお返しし
ます。満州で俺の腕もずいぶん上がったんですよ。動物の細工物は兄貴に負け
るけど、草木は俺の方が達者でした。特に薔薇はちよつとしたもんですよ。薔
薇は好きですか。

リュウ 嫌いじゃないわ。

ハニユウダ じゃ、彫りましょう。そうだ、すぐそこに良きそうな檜があつた
んです、それに彫ろう、いま持ってきますから。それに、葡萄酒の栓抜きも練
習します。

ハニユウダ、退場。

ハルタ おばあちゃん。

リュウ あんな人どうだっていいんだけど。

ハルタ でも嬉しそう。

リュウ 独りで越すには、この冬は寒すぎるから。

ハルタ 良かったね、見つけてもらえて。

リュウ 見つけてもらえたんじゃないな。

ハルタ 黄金のいなほ たびだつあなた

リュウ 見つけたんだよ。

ハルタ 星の雨ふる

リュウ いまさら綺麗になれるわけではないけれど。

ハルタ ひとりみあげる

リュウ 生きているから、生きていようかしら。ねえ。

四景

一景に同じ場所、数分後。ハルタ、チアキ、エナツ、トウジ、ユトリがいる。

ユトリ ハルタミキさん。

ハルタ はい。

ユトリ おかえりなさい。長旅おつかれさまでした。

エナツ どうでした。

ハルタ えつと、おばあちゃんと、おじいちゃんと、お母さんと、お父さんがいました。

チアキ じゃあ、

ハルタ はい。これおばあちゃんの形見です。おばあちゃんは、おじいちゃんが栓を開けるときの手が好きだったんです。たぶん、いっぱい栓を抜いた方が、おばあちゃんも喜んでくれるんで。これ、使ってください。

エナツ　え、だつてお母さんに返すんでしょ、おばあちゃんの形見なんでしょ。

ハルタ　自分だけで、会いにいきます。

トウジ　いいのかい。

ハルタ　娘に会いたくない母親がいるわけない、んですよね。

チアキ　めっちゃめっちゃ怒るけどね。

ハルタ　大丈夫です。観賞用より、実用品になったほうが、この子もうれしいと思うし。

トウジ　ますます気に入ったね。そういうことなら、本当に頂いてしまふよ。

エナツ　でも、

ハルタ　それに。一度なくしたものは、きちんとなくした方がいい。

トウジ　そうかい。

ハルタ　はい、それを教えてくれるために、帰ってきてくれたんだと思います。使ってください。

トウジ　分かった。

エナツ　他には、なにかあったの。

ハルタ　他には。お母さんは、ノート一冊分私の名前を考えてくれました。

苦勞もするだろうけど、そういうときに自分を見失わない、芯をもった子になつてほしいって。ごめんねって。わたしのことこんなに大事にしてくれたのに、ごめんね。

チアキ　バカ。あんた自分が何をしたか分かつてるの。あんたのしたことは犯罪よ。私がどれだけ大事にしたと思つてるの。私が、私がどれだけ。

ハルタ　ごめんね。

チアキ　ちゃんと食べてるの。もつと食べないとダメよ。

ハルタ　ごめんね。

チアキ　ありがとう。

ハルタ　ありがとう。

間。

エナツ　　雨、あがりましたね。

幕

劇中曲

花のゆりかご、星の雨

作曲 雨森 スウ／作詞 黒澤 世莉／編曲 星野 奈穂子、武井 翔子

花のゆりかご　　ゆられるわたし

月夜のゆびわ　　よりそうふたり

黄金のいなほ　　たびだつあなた

星の雨ふる　　ひとりみあげる

土砂雪雲　　あなたはわたし

海山風空　　わたしはあなた

朝昼夜明　　あなたはあなた

春夏秋冬　　わたしはわたし登場人物

上演にあたって

上演許可は左記までお問い合わせ下さい。

合同会社 Level 19

電子メール　　info@level19.net

発行元　　黒澤世莉　二〇二一年七月三日